

〈書評〉

保城広至『歴史から理論を創造する方法：社会科学と歴史学を統合する』

(勁草書房、二〇一五年、二〇〇〇円)

神野峻至 西山直志 長谷川隆一

ここに取り上げる著作『歴史から理論を創造する方法：社会科学と歴史学を統合する』のテーマは、「歴史学と社会科学を統合することを可能にする方法論を提示すること」(四頁)である。著者は単著として『アジア地域主義外交の行方：一九五二—一九六六』(木鐸社、二〇〇八年)を公としている、国際関係論を専門とする研究者である。二〇一〇年の『レヴァイアサン』第四七号に掲載された学界展望論文「国際関係論における歴史分析の理論化：外交史アプローチによる両者統合への方法的試み」から方法論研究へと向かった著者は、彼が人文学と位置付ける歴史学、そして社会諸科学の抱えている問題点を克服するために、両者を「統合」することを目指した。その成果として公にされたのが、本書となる。章別構成は以下の通りである。

序章 歴史と理論…古くて新しい緊張関係
はじめに

- 一 歴史学者による社会学者批判
 - 二 社会学者の見解
 - 三 歴史と理論の断絶にはらむ問題
- 第一章 中範囲の理論…イシュー・時間・空間の限定
はじめに
- 一 パターンと個性
 - 二 「自然主義」と社会科学
 - 三 社会科学理論の社会への影響
 - 四 中範囲の理論
- おわりに
- 第二章 「説明」とは何か？
はじめに
- 一 「説明」に関する三つの見解
 - 二 因果関係の解明としての「説明」
 - 三 統合としての「説明」

四 記述としての「説明」

五 解釈・理解としての「説明」？

六 二つの「説明」概念を同時に満足させる

おわりに

第三章 帰納／演繹、アブダクション

はじめに

一 帰納法とその問題点

二 社会科学における演繹法の陥穽

三 アブダクション

おわりに

第四章 構造的問いと事例全枚挙

はじめに

一 単一事例の問題点

二 構造化、焦点化された比較の方法

三 事例全枚挙

おわりに

第五章 過程構築から理論化へ

はじめに

一 過程追跡という手法

二 歴史過程の構築

三 抽象化、比較分析から理論化へ

おわりに

終章 さらになる議論を！

以下、評者三名による書評を展開する。本稿の内容要約と、評者らによる議論の方向性・大枠については、フランス近世史を専攻する神野が整理を行った（Ⅰ・Ⅱ）。次いで日本近代史を専攻する西山が主に史学史的な観点から言及を行い（Ⅲ）、中国古代史を専攻する長谷川が事例の扱い方について検討を行う（Ⅳ）。

Ⅰ

既に記したように、著者は歴史学が社会科学ではなく人文学のひとつであるという立場に立っている。そして、政治学・経済学・社会学に代表される社会科学とは異なる学問分野であり、アブローチや分析対象、そして学術論文の形式も異なっているというのが一般的な見解であるとされる。

著者は歴史学と社会科学の抱えている問題をそれぞれ以下のように整理する。まず、歴史学者の多くは個別事例の詳細な分析にのみ関心を示すため、全体的な理解にさほど貢献しようとしない。このような「木を見て森を見ない」歴史学者は、自らの研究対象を比較するという観点が欠けているだけでなく、その歴史研究が理論構築と断絶しているという。これに対して社会科学者は理論化の作業に関心を払うが、現実を理論のなかに押し込めて自説にそぐわない歴史解釈を捨象するという問題——「プロクルーステースの寝台」問題——を抱えている。故に、上述のような両者が抱える問題を解決するため、「一方で歴史的事実分析を行い、他方で自ら築き上げたその実証結果でさらに理論を構築する」（二三頁）方法を提唱するのであった。

では本書において、その方法論はどのような形で示されるのだろうか。以下、各章の概要について整理したい。

第一章「中範囲の理論・イシュー・時間・空間の限定」では、著者の提唱する「中範囲の理論」の骨子と、その前提として、いかなる理論が有効であるのかについて考察される。著者が強調することは以下の二点にまとめられることができるだろう。過去に起った様々な現象を検討するにあたり、そこには類似するパターンが存在しており、比較と一般化が可能であるという点、そして「自然主義」に代表されるような包括的歴史法則については、時代と空間に限定されない研究は存在しないという点である。故に、著者はR・K・マートンやJ・L・ギャデイスらのように、特定の時間と空間そしてイシューを限定し、自らの実証的歴史研究に基づいた理論である「中範囲の理論」を練り上げることを主張した。そこにおいては一般化のため、地域的な限定をかけて対象を「ひとつの組織や集団の行動、一国の政策、あるいは（日米関係など）ひとつの国家間関係に限定すること」（四三頁）が望ましいとされる。

第二章「説明」とは何か?」では、理論を述べる際に必要となる「説明」概念について論じられる。著者は、科学において「説明」という概念が三つの意味で使用されると述べる。すなわち、因果説・統合説・記述説であるが、著者はこのうち因果説と記述説を満たすことで、歴史研究と理論が「統合」されるのだとする。つまり、著者の目指す「中範囲の理論」においては、新たな事実を先行研究とは異なる角度から記述的に明らかかなものとし、それが何故起こり得たのかという因果を検討することが「説明」となる

のである。

第三章「帰納／演繹、アブダクション」では、帰納法と演繹法についての検討がなされ、いずれも社会分析には不適切であると位置付けた上で、アブダクションという推論の方法が提唱される。まず、帰納法には「実験の不可能性」と「帰納的飛躍」そして「理論的負荷性」の問題があり、とりわけ「実験の不可能性」と「帰納的飛躍」の問題から推論の方法として不適切であるとする。他方、演繹法については前提も結論も真であると証明できないとする。そこで著者が採用するのが、作業仮説によって現象の原因を突き止める推論の方法アブダクションであり、これによって歴史分析から理論形成まで至ることができるとされた。

第四章「構造的問いと事例全枚挙」では、理論と仮説を検証する為の、事例選択の方法が検討される。著者は単一事例からの理論構築には否定的であり、限定を掛けた範囲内における全ての事例を分析する「事例全枚挙」を提唱する。これは事例選択の恣意性を回避する為であるとされる。これによって現象が生じた原因を突き止める、次いでその原因が存在していたにも関わらず現象が発生しなかった事例を調査し、何故現象が起こり得なかったのかという問いを立てて検証することを著者は提唱する。

第五章「過程構築から理論化へ」では、分析対象の因果関係を歴史分析に則って積み重ねて行く「過程構築」が論じられ、その手法によって明らかになった成果を抽象化して分割表に当て嵌め、理論化を行うことが提唱される。著者は分析対象とされる現象のプロセスを最初から最後まで明らかにすることで「プロクルーステースの

「寝台」問題を回避し得るとした。そしてそこで得られた成果を元として、事例と原因を表とすることで、どのような条件下で現象が発生し得るのかなどの体系的な比較分析が可能になると述べた。こうして「中範囲の理論」が形成されるのである。

さて、以上が内容の要約であるが、次になぜ本書を取り上げるのかについて言及せねばなるまい。まず第一に、本書の推論の方法が歴史学においても一定程度有用だからである。これは、歴史家が無意識的あるいは暗黙的に用いてきた方法を活字化したという意味においてである。第二として、本書の通読によって著者の区分する限りで「社会科学」と「歴史学」の共通点と相違点が明白となり、両者の論点が立ち現れてきたからである。

本書の中で取り上げられる様々な研究上の方法論から、評者三名（神野・西山・長谷川）は学ぶことが多かった。その意味で、研究の方法論を学ぶ良書と言うことができよう。しかしながら、通読していく過程で特に第四章以降には違和感を覚えたことも確かであった。著者は本書の読者層について「社会科学と歴史学を専門とする研究者だけに限定されない。同分野を専攻する大学院生、あるいはレポートや卒業論文を執筆しなければならない大学学部生など」を想定している。故に、文学部史学科で教育を受けた大学院生が本書に抱いた違和感や、本書で言われるところの「歴史学」と「社会科学」の食い違いの在り処を示すことは、無意味ではないと考えたのである。

（神野 峻至）

II

本書は社会科学と歴史学の「統合」を目指し、双方の問題点を解決しようとする視座から、特定のイシューと時代と空間において通用する「中範囲の理論」の構築を検討している。このような視点はユニークであり、故に本書は評価されて然るべきである。ただしここでは、著者の大きな課題であった「プロクルーステースの寝台」問題に関連してまずは所感を述べ、次いで第四章以降で提示される方法への違和感について述べることにしたい。

まず言及しなければならないのは、聊か歴史学に対する著者の見方が一方的すぎはしないかという点である。著者は歴史学が人文文学であると断定したうえで議論を展開していくが、しかし実際には歴史学を社会科学であると考える研究者は多く、歴史研究者の必読文献である遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会、二〇一〇年）も同様の観点から叙述されている。さらに言えば、巻末の引用文献を見ても、右の遅塚による大著を含め、「史学概論」に類するものはほぼ無いと言つて良い。たとえば林健太郎『史学概論』（有斐閣、一九五三年）や、弓削達『歴史学入門』（東京大学出版会、一九八六年）、福井憲彦『歴史学入門』（岩波書店、二〇〇六年）などであるが、これらへの言及が見られない以上、著者が歴史学側の議論を汲み取り反映しきれないままに議論を進めている感が拭い切れない。あるいは、著者が立ち向かおうとした「プロクルーステースの寝台」問題——自らの論に都合の良いものだけを抽出して利用するというもの——が、著者の歴史学の整理に現れてはいないだろうか。

何故、色川大吉が歴史家の代表格のように語られるのか、本書を読んでも著者の意図が分からないままである。一方的な「統合」を指したところで、それは「社会科学」による歴史学の接収となってしまうであろう。

また、「プロクルステースの寝台」問題が、結果として「中絶の理論」によって解決し得たかと言えは疑問が残る。たとえばアブダクションという推論の方法にせよ、A・L・ジョーラの「構造化、焦点化された比較の方法」にせよ、その有効性は承認され得るが、しかし推論を行ったり社会現象に焦点を定めたりすることについては、統一的な基準がある訳ではなく、研究者自身の選択に依らざるを得ない。

そして歴史研究とは「問いかけ」の学問である。史料はそのままでは意味を成さず、歴史家が問題意識のもとで問い掛けることによつてはじめて応えてくれる。研究者がいくら客観的であろうと努めても、史料の相互関係が「焦点化」という研究者の主目的選択の下で「解釈」されるであろう。本書に従ってアブダクションという方法を採用すれば、代替可能とはいえず、推論という志向性の軸に従って議論の途が定まることになる。故に、史料から浮かび上がる歴史像は、研究者の「解釈」の産物でしかないのだ。すると、史料選択の恣意性という問題がクリアされたとしても、今度は史料の読解という次元で恣意性が現れかねないのだが、この点について著者は言及を行ってはいない。

しかし、このように「プロクルステースの寝台」問題をめぐって批判を行ったものの、評者の実際の歴史研究の場において、それ

が解決されているかと問われれば否である。論文の形態として、「はじめに」で論点を示す以上、そこには説得のためのロジックが現れるし、本論における史料の解釈にも、上述のように研究者の主体意識が反映される。だがそのようにして提出される学術論文は、絶えず他の研究者によって批判を受けるであろう。それこそが、過去という直接的に見ることのできない複雑で重層的な人間社会を取り扱う歴史学の歩んできた道であった。ひとつの過去の事例をとつてみても、その解釈は多面的であり、決して一面的なものではありえないのである。その最たる例が、フランス革命をめぐる今日までの議論であると言っても良い。

さて、「プロクルステースの寝台」問題を解決する術を、評者は提示することができない。しかし、さしあたって次のような立場を示したい。まず、「プロクルステースの寝台」問題は、一九世紀以来の制度化された「法則定立的」あるいは「個別記述的」な学問においてはまず逃れられない。⁽³⁾その上で、評者が示す立場は、自らがどのような意志と角度でもって史料に向き合い歴史分析を行ったのかという「問題意識」を絶対に明確にするというものである。自らの偏向性を自覚的に認識し、それを衆目の下に提示することを経てはじめて議論に加わるのである。そうしなければ、同じ土俵に立つて建設的な議論を行うことはできないだろう。

次いで、著者の「歴史過程の構築」の問題点として、史料という「痕跡の欠如」についての考察がなされていない点を挙げたい。たとえば二宮宏之が指摘しているように、史料として多く残存しているのは政治文書や外交文書や軍事文書といった国家や権力に関する

記録である。⁽⁴⁾ そういった史料を用いる場合には史料そのものが「権力者によって作成された」という前提に立たねばならないが、さらにその全てが残存している訳でもないことに留意せねばならない。たとえば評者の専門とする近世フランスのバリにおいて、教区簿冊のような重大な史料が喪失されてしまっているのはよく知られている。⁽⁵⁾ さらに今日の公文書管理の実態を踏まえれば明らかかなように、史料の残存には権力のバイアスがかかるのが通例である。そして史料は常に散逸の危機にある。そのような次元を目的当りにしたとき、はたして著者の主張する「事例全枚拳」は可能になるのだろうか。

最後に、著者が述べる理論化という志向性について言及したい。既に述べたように、ひとつの事例分析であっても解釈は多面的であり得る。とすれば、本書で提唱される理論化へのプロセスを経るには「事例全枚拳」で言われるところの個別事例の分析を、全て学術論文やその他の形で公表し、議論を経る必要があるだろう。その上で理論化を行わなければならない。そうしなければ、理論の説得性を真に受け入れることは難しいからである。そもそもからして歴史理論というのは、重層的に成り立つ人間社会の枝葉を削ぎ落し、説得的な説明原理へ整えるものであるろう。その作業については研究者の間で賛否両論が有り得るだろうが、評者は理論の重要性を認識しつつ、同時に削ぎ落とされるものにも目を向けたのである。

(神野 峻至)

III

はじめに史料ありきと考える私たち歴史学研究者が、自らがどのような方法によって研究しているのかを理路整然と述べることが稀なのは、何故であろうか。恐らく私たちは、何か一貫した方法を採用している訳ではなく、安丸良夫がかつて「方法的無方法」⁽⁶⁾ と呼んだような、虚心坦懐に史料に向き合う中で獲得される認識を、思考の拠り所としている。それは、対象とする過去それ自体が、圧倒的に未知で複雑な世界であるからであり、いわば採り得る方法を総動員して歴史に接近しようと試みるのである。

対して本書では、著者の研究方法が、自らの経験に裏打ちされる形で鮮やかに提示されており、突き抜けた明快さがある。そこに、普段は無手勝流に試行錯誤する者としては、戸惑いを隠せないのが正直な心境である。だが見方を変えれば、自らが日ごろ雑然と行っているような作業に対して、説明概念を与えられて腑分けされ、その良し悪しが論じられている側面があり、読者は自らの方法との距離を測りながら読むことで、それを問い直す機会を得ることになる。また、本書は様々な学問分野の読者を想定しており、そうした学問を開いていこうとする著者の姿勢に共感を覚えたことを、まず述べておきたい。

その上で、社会科学と並んで「統合」の対象となっている歴史学を学ぶ立場から、書評を試みたい。評者が大きな問題と考えるのは、本書における歴史学の扱い方である。社会科学の定性的研究に対する言及の深さと対照的に、歴史学の扱い方には違和感を抱かざるを

得なかつた。そこで本節では、この違和感について、以下三つの点から論じていきたい。

まず違和感の第一は、書名にも表れているように、本書では歴史学と社会科学が対置されている点である。この点を、史学史の検討を通して明らかにしてみたい。

近年、歴史学の自己点検として、史学史の検証が盛んに行われている。その中で、日本の歴史学の歩みを、「戦後歴史学」から「社会史」・「民衆史」の隆盛を経て「現代歴史学」へゆるやかに転成した、という大きな見取り図は、歴史学研究者の間では広く共有されていると言つて良いだろう。

「戦後歴史学」という言葉で括られる史学史上の用語は、使用する者によって様々な意味を付与されるが、大枠としては、第二次世界大戦後から一九七〇年代くらいまでの日本の歴史学界で、大きな影響力を持っていた研究潮流を指している。その特徴は、「マルクス主義を基調としつつ、近代社会科学の概念と方法に準拠した科学的歴史学」を追求したところにあつた。すなわち、この時期の歴史学は、「理論と実証の幸福な結合」によって、科学的客観性を担保できると信じる限りで、社会科学の中心に位置していたのである。こうした社会科学としての「戦後歴史学」は、その後も歴史学界に強い影響力を与え続けた。⁽⁹⁾

一方で、一九七〇年代に入ると、日本社会の変化とも関わって歴史学の在り様も転換し、これまでの発展史観への批判として、「社会史」や「民衆史」と呼ばれる研究潮流が現われた。フランスのアナール学派や、民俗学・人類学などの人文諸科学から大きな影響を

受けて、従来とは異なる「下から」の歴史が盛んに論じられ、それに伴つて研究対象自体も大きく拡張した。

さらに、一九九〇年代を迎えると、冷戦の崩壊やグローバル化の進行などを契機として、再び大きく研究潮流が変容して現在に至っている。その中で、それまで自明視されがちだった国民国家の枠組みの相対化が進み、近年はグローバル・ヒストリーや、歴史のトランスナショナル化などが論じられている。⁽¹⁰⁾ さらに、構築主義的な歴史の「物語り」論や言語論的転回論も、歴史学に対する大きな批判として受け止められた。こうして、歴史の認識論的な転換とともに、様々な学問分野から刺激を受けた歴史学は、多様な論じ方を獲得していった。⁽¹¹⁾

以上、評者の力量から日本の動向に限つたものとなつたが、史学史に触れた。ここから二つの点を確認しておきたい。それは第一に、歴史学それ自体が時代によって変化をし、その方法を模索してきたことである。本書の中では、様々な時代の歴史家が押し並べて「歴史学」を代表する者として扱われているが、その言説が現在の歴史学の立場を代弁し得るものかどうかは、疑問が残る部分があつた。

また、上述のように多様化した現在の歴史学は、一括りで論じることが難しい程の幅を持っているだろう。これが確認の第二である。この点に関して、遅塚忠躬は、歴史学は極めて曖昧な学問であるが、そうであるがゆえに「総合科学」で有り得ると喝破した。⁽¹²⁾ そもそも遅塚は歴史学を社会科学と捉えているのだが、この見方に立てば、歴史学の対概念を想定すること自体が難しくなる。

翻つて、本書で言う歴史学は、社会科学と対置されるものとして

位置づけられ、個性記述的な実証分析を行う学問とされる。だが、上述の議論を踏まえれば、歴史学と社会科学を対置させる見方は一面的と言べきだろう。

なお、著者は事実上、史学史の問題を回避しているように見える。¹³しかし、この社会科学と歴史学を対置させる理解が、両者の歩み寄りが「中範囲の理論」によって可能になるという結論を導く、いわば戦略的な前提として設定されていることは、本書の議論の根幹に関わる問題であろう。

続いて、違和感の第二に移ろう。それは、本書における「理論」の捉え方が、規則性の解明という点に収斂してしまっている点である。

この点は、具体的な理論化の方法を提示した本書の第五章で、その結論が、事例の抽象化と比較・類型分析によって、「相対的に重要な要因——繰り返しされるパターン——を明らかにすることができ」（一四五頁）とされていることに明白である。つまり本書では、理論化を行うことは「繰り返しされるパターン」を解明すること、ほとんど同義となっているのである。

さて、上述した社会科学としての「戦後歴史学」は、歴史の発展法則の解明を志向し、その意味では本書で言うところの理論化に近い志向を強く持っていた。だが、現在の歴史学では、そうした志向性は見られない。しかし、だからといって歴史学が、「全体的理解にあまり貢献しようとしなない」（一六頁）とは言えないと考える。

確かに、個々の研究論文はますます精緻化・専門化し、その対象が広範かつ細かな事象にまで及んでいることは事実である。だが、

史料の読解を通してそうした細かな個別事象に拘る一方で、歴史学研究者は不断に歴史の全体像を構想する。¹⁴そして、歴史的世界の全体像との関連で、一つ一つの史料を歴史的文脈に位置付けて解釈を施し、それらのうちに意味連関を見出し、ある歴史像を浮かび上がらせている。¹⁵このような「全体史」への視座をもった歴史学も、規則性とはまた別の次元で、歴史の「全体的理解」への途を開いているといえよう。

重要なことは、こうした歴史の全体像ないし時代像へ迫る方法は必ずしも一様ではない点である。その方法は、個々の研究者の問題関心や、研究対象とする場所や空間、向き合っている史料の特質などによって、主体的に選び採られるのである。

この点、本書との関連で言えば、確かに歴史学は説明の記述説に重きを置くのである（五六頁）。この第二章で著者は、説明の因果説と記述説の統合を提唱した。だが、第五章での分割表に事例を入れ込む作業に象徴的なように、その説明法は端的に言うて因果説に記述説を補完するもので、最終的な理論化に際しての説明では因果説を採用しているように見える。もともとこれは、理論化の作業そのものが、因果の確定という側面を含むからであり、本書が理論化を目指す以上、避けられないことなのだろう。

ここで、第三の違和感に到達する。それは、理論化を行うことが、歴史的事象の解明にとって最も重要なことなのか、という懐疑である。

歴史学が対象とする過去は、圧倒的に未知な世界である。であるから、そこで示される議論は、暫定的であることを免れない。著者

が対象を限定した「中範囲の理論」を掲げるのも、この点を考慮してのことだろう。しかし評者は、対象を限定しさえすれば暫定性を回避でき理論化が可能になる、という楽観論に組み込むことは出来ない。すなわち、ある範囲の限定をかけたとしても、そこで生じる出来事（事例）を等質的に扱うことは難しいと考える。

評者は、現在の歴史学が、本書の言う意味での理論化、すなわち歴史の一般化（パターン化）に禁欲的となったのは、歴史記述の主体性や研究主体の現在性などの問題を、強く意識した結果でもあると考える。つまり、歴史を叙述する主体が恣意性を免れ得ないという問題と、歴史の叙述は常に現在の価値観からの影響を受けるという問題、さらには過去の痕跡としての歴史資料はその一部分でしかないという問題を突き詰めて考えると、歴史の一般化はそう易々とは行いえない。そこで可能となるのは、個々の史料を出発点として、それによる事実の確定、意味連関の解釈、その時代に固有の意味の解明、これらの作業を、「歴史と現在のあいだを行きつ戻りつしながら」、具体的な「現場」に即して行っていくことである。¹⁶⁾

さらに評者は、完成された理論を追究することは、むしろ歴史的な現実を歪めるのではないかと思う。それよりも、個々の現場に即して歴史の複雑性を受け止め、各々の研究者が設定した問いに応じた歴史叙述を行い、それらの妥当性を相互に批判し合う中で、歴史により深く踏み込んでいくことが学問的課題となっているのではないか。小田中直樹が、歴史家相互のコミュニケーション、すなわち複数形の主体による批判的検討によって、「相対的で暫定的に妥当な歴史像を構築すること」の重要性を提起しているのは、そのため

であろう。¹⁷⁾

以上は、評者なりの現在の歴史学に対する素描であるが、こうした「現代歴史学」の考え方と、本書で主張される理論化の方向は、どのように交わることが出来るのであろうか。

（西山 直志）

IV

著者は「歴史学と社会科学を統合する」ことを目指した。まず、その試みについては高く評価すべきであろう。また、評者の立場は前節までに書評を行った二氏とは意見を若干異にする箇所がある。具体的に言えば、「事例全枚挙」と「中範囲の理論」についてである。その点を踏まえたくえで、書評を行うこととしたい。

書評の手順として、著者が自身の研究にひきつけ、立場を明らかにしたことと同じく、評者も具体的な作業を通して、歴史学における事例の扱い方を述べる。そして、それを踏まえたくえで著者の言う「過程構築」という作業の妥当性について検討し、ついで「事例全枚挙」と「中範囲の理論」についても評者の考えを述べたい。

評者は、中国古代史を専攻しており、その中でも特に後漢時代における「反乱」について研究している。今回は、その中からいくつかの事例を取り上げ、検討したいと思う。

後漢中・後期における「反乱」の一つとして先零羌の反乱がある。史料を挙げると「一一〇年、先零羌が襄中^{せんちゆう}に侵入し、漢中太守の鄭勤^{けん}は戰歿する」「先零羌寇襄中、漢中太守鄭勤戰歿」（『後漢書』紀五 安帝永初四年条）という事例がある。襄中とは、漢中郡に所属

している県であり、漢中郡は、益州に所属している郡である。また、もう一つ別の「反乱」事例の史料を挙げてみると「一一四年、蜀郡夷が蠶陵に侵攻し、縣令を殺害した」⁽¹⁸⁾「蜀郡夷寇蠶陵、殺縣令」〔後漢書〕紀五 安帝元初元年条とある。蠶陵は蜀郡に属している県であり、蜀郡は益州に所属している郡である。違う民族が起した「反乱」であるので、一見すると何も関係の無いように見える。しかし、この二つの史料（その他にも多々あるが）⁽¹⁸⁾を見てみると、一つの因果関係に気づくのである。それは、二つ目に取り上げた蜀郡夷の事例は、実は先零羌の益州侵攻に呼応しているのではないか、ということである。事実、これより後、益州において多くの「反乱」が起こっていることも、その傍証となると思われ、評者の仮定を補強するものであると考えられる⁽¹⁹⁾。

前段で述べたことは、歴史学におけるごく一般的な事例の因果関係の実証作業である。実際、同様の作業工程を著者は、「過程構築」と名付けており、この工程は歴史学と社会科学で行うことが一致している。この点は評価できるところであろう。しかし、著者は、この作業を行えば「個々の事例の全体像を歴史的に明らかにすることが出来る」⁽²⁰⁾と述べている。確かに、この作業を完璧に行うことが出来れば、理論化する際に、非常に有用であるように思う。しかし、果たしてそれは可能なのだろうか。

過去に向けて問いを行うとき、記述できる範囲は、時代や地域における史料の残存状況や、その史料の偏向性によっても知らず知らずのうちに大きく左右されている⁽²⁰⁾。たとえば、再び自身の研究に引き付けるが、評者は史料に主として、范曄『後漢書』を用いてい

る。この史料は後漢が滅んでから二百年後に成立したものであり、同時代性はほぼ失われている⁽²¹⁾。さらに、撰述した范曄は、所謂六朝貴族であり、自身が貴族である淵源を後漢末期の人士に求めた⁽²²⁾。そのような記述態度であるのだから、当然范曄の価値観が多分に含まれている状態で、史料は選ばれているのである⁽²³⁾。そのことを踏まえて、「過程構築」の妥当性について考えてみると、著者の「ある事例における結果に至るプロセスを、始めから最後まで明らかにしなければならぬ」⁽²³⁾（一三三頁）という主張は、やはり限界があると言わざるを得ない。

しかし反面、用いることのできる史料が、他の時代に比べてかなり限られている古代史研究において、実は著者のいう「事例全枚挙」や「中範囲の理論」は親和性が高いのも、また事実である。たとえば、先にあげた「反乱」の事例は、後漢の中・後期において二〇〇件以上あるが、これはそのほとんどを范曄『後漢書』から抽出している。そのほかの史料としては、『資治通鑑』や『華陽國志』などもあるが、その史料も范曄『後漢書』ないし、それが参考にした先行史料を参考にしているので、結局、范曄『後漢書』にあげられているものと大差ない。そのため、そもそも、同時代性や、撰述者の価値観にかかわらず、抽出できる事例は、かなり限られているのである。そのことを踏まえると、著者のいう「事例全枚挙」という作業は、評者の立場から見れば、それに向けて最大限行おうと試みることは、意味のあることだと思われる。また、それを踏まえたうえで「中範囲の理論」というものを考えると、限られた史料の中で「時間・空間・イシュー」を限定し、事例をできるだけ抽出する

という作業は、すべてを承認することはできないにせよ、一定の妥当性はあると評者は考える。

以上まとめると、史料から読み取れる限界、そしてそもそも残存している史料を検討するしかないという限界、これらを意識して取り組まない限り、ランケ以来の歴史学から進歩できていないことになりかねない。しかし反面、実は史料の限られている古代史を専攻している評者にとっては、「事例全枚挙」と「中範囲の理論」は親和性が高く、妥当性はあると考えられる。そのため、評者は、本書に対して一定の賛意を示すものである。

(長谷川 隆一)

V

私たち評者に共通する本稿執筆の動機は、基本的に社会科学の定性的研究に親和性をもつと読み取れる著者が、歴史学を外在的に扱っているのではないか、という本書の構えに対する違和感にあった。そこで、本書を受けての私たちの考え方を示したのが本稿である。²⁴

さて、以上三つの節にわたって、評者三名それぞれの立場から書評を試みた。そこで最後に、著者の方法論と私たちが考える歴史学のそれとが異なる点を、大きく三つの点から整理しておきたい。

第一に、史料の問題である。史料に根拠を置いて論ずることは、歴史学にとっては最も重要な命題である。その性質の偏向性、残存の偏在性や限界については、常に念頭に置かれるべきであり、方法を論ずるに当たっても抜き難い問題であると考ええる。一方では個々の

具体的な現場に足場をもち、他方ではそれをある時代の中に位置づける。このような行為は分かち難く結びついているのである。

それは第二として、研究主体の問題があるからである。「問いかけ」の学問たる歴史学は、それを問う主体の思考や意識が大きく介在する。それを読み解く研究主体が存在して始めて、史料は歴史の痕跡たりえる。つまり、ある歴史像は、そうした研究者の解釈を経なければ立ち現れないのである。

また第三に、歴史学の変容と多様性の問題がある。端的に言って私たちは、本書における歴史学の設定の仕方が、不十分なし不明瞭だと考える。史学史の検討によって明らかにしたように、歴史学は元来社会科学と対置するものでは無く、現在の歴史学は多様な在り方を見せている。そして、そこに優劣が存在すると言うよりは、方法の多様性については承認しつつ研究者相互の批判と応答の中で、歴史そのものに近づこうと試みられているのである。

そもそも本書は、著者が主戦場とする国際関係論の分野で社会科学と歴史学の方法を「統合」することが意味だ、という以上のことを述べているわけではない。言い換えれば、筆者が歴史学と社会科学、両学問の間に位置する国際関係論を生業とするがゆえに、両者の利点を活かす方法を模索し、その有り得るべき解決策を示した成果である。

このように、自らが研究を行う中で磨いた方法論を明確に示したところに、本書の大きな価値がある。歴史学研究者はこうした作業は不得手とするが、本書での問題提起を引き取ろうとすれば、歴史学の側でも、叙述の方法をめぐる議論がより活性化されていく必要

があるのではないだろうか。

(西山 直志)

【附記】本稿の執筆は、学習院大学史学会の学部生・院生から構成される登録研究会の一つ「乱読会」で、本書を輪読本として取り上げたことに起因する。よって、会での討議が論の出発点となっているが、本稿の執筆自体は標記の三人によるものである。

註

- (1) 本書の「はじめに」(i頁)を参照のこと。
- (2) この点について言及しているのは、たとえば著者も引用しているブックであるが(マルク・ブロック『新版 歴史のための弁明』松村剛訳、岩波書店、二〇〇四年、原著：一九四九年、二宮宏之「歴史の作法」(『二宮宏之著作集 二』岩波書店、二〇一二年、初出：二〇〇四年)も重要であろう。

また、安丸良夫「『方法』としての思想史」はしがきも参照されたい(『安丸良夫集 六』岩波書店、二〇一三年、初出：一九九六年)。このなかで安丸は次のように述べる。「こうして私たちは、さまざまの理論や先行研究などを参考にすることができるけれども、結局のところは、歴史家としての私たち個々人の人間や社会を理解する能力に依拠して「事実」に引き合っているだけである。(中略) 私は、歴史家とは、史料と「事実」とを特定の場における時代性とかかわりて理解・解釈する立場を選んだ者のことだと考える」(一九頁)。

- (3) 問題提起の書として、ここではウォーラー斯坦ンの『脱II社会科学』を挙げる(イマニエル・ウォーラー斯坦ン『脱II社会科学 一九世紀パラダイムの限界』藤原書店、一九九三年、原著：一九九一年)。

ウォーラー斯坦ンは「変化が常態であること」に、どのように政治的に対応するか(三〇頁)という課題において「具体的なまぐろみ」(同頁)を為すために、法則定立的な社会科学が必要とされ利用されたとの見解を示している。

- (4) 「痕跡の欠如」については、たとえば前掲・二宮「歴史の作法」(二二頁―三五頁)を参照のこと。
- (5) フランソワ・ルジヨセフ・ルジジウ、アラン・ティレ「方法と史料―八世紀パリの社会史を書く―史料紹介―」竹下和亮訳(『高澤紀恵ほか編、パリと江戸 伝統都市の比較史へ』山川出版、二〇〇九年、一七五頁)を参照のこと。
- (6) 前掲・安丸「『方法』としての思想史」はしがき一五頁。
- (7) 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」(『二宮宏之著作集 四』岩波書店、二〇一一年、初出：一九九九年)、成田龍一「近現代日本史と歴史学」(『中央公論新社、二〇一二年)など。
- (8) 以上、引用は、同前・二宮「戦後歴史学と社会史」六頁。
なお、本書との関係で言えば、たとえば大塚久雄に対する評価が気になるところである。戦後歴史学の代表的論者である大塚が、著者の専門分野である国際関係論においても、先行研究者になると思われるからである。
- (9) 「戦後歴史学」の同時代的な観察としては、遠山茂樹「戦後の歴史学と歴史意識」(岩波書店、一九六八年)、成瀬治「世界史の意識と理論」(岩波書店、一九七七年)など。
- (10) 羽田正「新しい世界史へ」(岩波書店、二〇一一年)、岡本充弘「開かれた歴史へ」(御茶の水書房、二〇一三年)など。
- (11) 一九八〇〜九〇年代の歴史学についての総括を試みたものとして、歴史学研究会編『歴史学における方法的転回 現代歴史学の成果と課題 一九八〇―二〇〇〇年 I』(青木書店、二〇〇二年)がある。
- (12) 遅塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、二〇一〇年)。
- (13) 著者は、本書三二頁の註三で「ちなみにマルクス主義と歴史学に関する

る問題は非常に幅広く、また奥深いものであり、本書で扱える範囲を超えている。そのため本書ではこれ以降、マルクス主義と歴史学の関係にはあえて触れない」と述べている。

(14) 評者は、次の文章を念頭に置いている。「私は、歴史学には全体性という概念が重要だと考えるが、それはいわば史料からは見えにくい次元も含めて歴史の全体性をダイナミックに見るための方法の概念である。私たちが実際に知りうることはむしろ狭く限定されているのだけれども、私たちは無自覚のうちにも個々の知見を全体性の光に照らしてとらえかえしているものであり、問題はそのことを自覚化し方法化することができるか否かにあるのであろう。」(前掲・安丸『方法』としての思想史)はしがき一八頁)。

(15) 前掲・二宮「歴史の作法」。評者は、この論文で述べられる、「二重のオペレーション」(二五二頁)を意識している。

(16) 大門正克『歴史への問い／現在への問い』(校倉書房、二〇〇八年)三頁および一〇四—一〇六頁。

(17) 小田中直樹『歴史学のアポリア』(山川出版社、二〇〇二年)七七頁。なお、こうした小田中の主張が、言語決定論的な潮流(言語論的転回)への応答の中で紡ぎだされたものであることを附記しておきたい。

(18) たとえば、越嶲夷が遂久令を殺害した事例「十二月、越嶲夷寇遂久、殺縣令」(後漢書)紀五「安帝紀元初四年条」なども、先零羌の侵入に呼応して蜂起した蛮夷の事例と考えることができる。

(19) このことは、上田早苗「巴蜀の豪族と国家権力—陳寿とその祖先たちを中心に—」(『東洋史研究』二五—四、一九六七年)に「羌族の侵入は、益州各地に散居する蛮夷に刺激を与え連鎖的にかげらの蜂起をも誘発することになる」(四頁)とある。ここにいう連鎖的な蜂起の一つの具体的な事例が、上にあげた蜀郡夷の事例なのである。

(20) 史料の偏在については、E・H・カー著 清水幾太郎訳『歴史とは何か』(岩波新書、一九六二年)、遅塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、

二〇一〇年)の第三章第三節「歴史的世界における事実と真実」を参照。
(21) ただし、范曄『後漢書』は先に成立していた『東觀漢記』や所謂『八家後漢書』、東晋時代に成立していた『後漢紀』などを参照して、范曄が撰述していることは、述べておく。

(22) 吉川忠夫「范曄と後漢末期」(『六朝精神史研究(東洋史研究叢刊)』同朋舎、一九八四年、初出…一九六七年)。

(23) E・H・カーは、前掲書の中で「歴史を研究する前に、歴史家を研究してください」と述べている。歴史的事実の確定にのみ注力しては絶対に気づくことのできないという指摘と謂えるだろう。

(24) とはいえ、著者と専門分野を異にすることもあって、私たちの批評も外在的であることを免れ得ないだろうが、他の学問分野との積極的な対話を試みる著者への敬意を込めた、一先ずの率直な応答と承知願いたい。